



勉強のコツを勉強しよう

「勉強のコツ」について、道徳の時間に勉強しました。

その後半3分の1の部分を紹介します。

(2組と3組は、土曜日のオンライン授業で行いました。)

最初に、次の絵を見せました。

何歳の人が描いた絵でしょう。

「2歳です！」

「4歳です！」

「3歳です！」

正解は、3歳です。

私の娘が書いた、私です。

みんな笑っていましたが、どの子もこうした段階を経て今に至っています。

中々振り返ることのできない自分の成長を感じてもらいたいと思いました。

今日は特別にプロの絵も持ってきました。

そう話して、次の作品を見せていきました。



「わぁ」「上手！」

と反応が返ってきました。

勉強の「コツ」なので、当然ポイントを伝える必要があります。

「絵が上手になるコツは、『たくさん書くこと』です。中々思うような線が引けなかったり、うまく筆先が動かなかったとしても、何枚も何枚も書いているうちに絵は確実に上達してきます。」

絵の基本は、筆や鉛筆を動かすことです。

そこで、今度は「字」を見せました。

何歳の方が書いた字でしょう。

「2歳！」

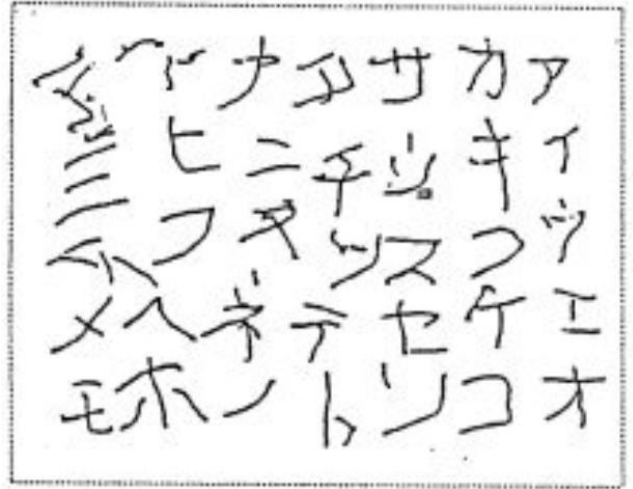
「5歳です！」

「4歳です。」

数人に聞いた後、答えを告げます。

この字を書いた人は、26歳です。

「え・・・？」と、多くの子どもたちが固まりました。



この字を書いた人は星野富弘さんという方です。

さっきの字は、星野さんが26歳の時に書いたものです。

ここから、映像を交えながら星野さんの半生を振り返っていきました。

実は、先生をしていました。

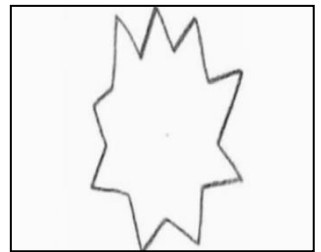
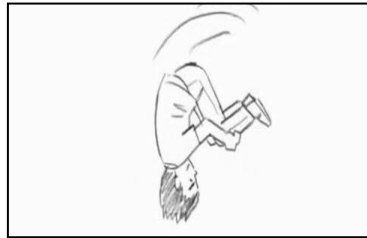
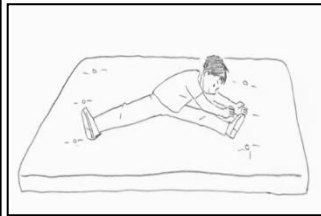
体を動かすことが小さい頃から大好きだった星野さんは、中学校の体育の先生になりました。

そして、得意な体操を教えて、とても充実した日々を送っていました。

ところがある日、悲劇が星野さんを襲います。

授業で得意の宙返りを教えている時でした。誤って、首からマットに落ちた星野さんは、首の骨を折る大けがを負ってしまいました。

そのまますぐに救急車で運ばれました。
お医者さんが、お腹や胸や足を触っても、まったく感覚がありません。
星野さんはけがのために、首から下が全く動かなくなってしまったので
す。



星野さんは、全く動かなくなってしまった体のことで、死んでしまいたい
と考えるほど深く悩み、つらい日々を送りました。

毎日一所懸命お世話してくれるお母さんにすら、つらく当たってしまうこ
ともあったそうです。

そんなある日のことです。

深く落ち込む星野さんが変わるきっかけとなる出来事がありました。

ある日、同じ病室にいた中学生の男の子が、転院することになりました。

名前を、高久君といいます。

命の危険もある大病を患っている彼に対して、同じ病室のみんなで、高久
君を励ますプレゼントを贈ろうということになりました。

プレゼントは、ぼうしです。そのぼうしに、病室のみんなで作った寄せ書きを書

いてあげようということになりました。

星野さんは、高久くんを何としても喜ばせて、励ましてあげたいと強く思いました。けれど、自分は首から下が全く動きません。

—呼吸おいて、尋ねました。

星野さんは、どうしたと思いますか。

「口で書いた！」

「ペンをくわえた！」

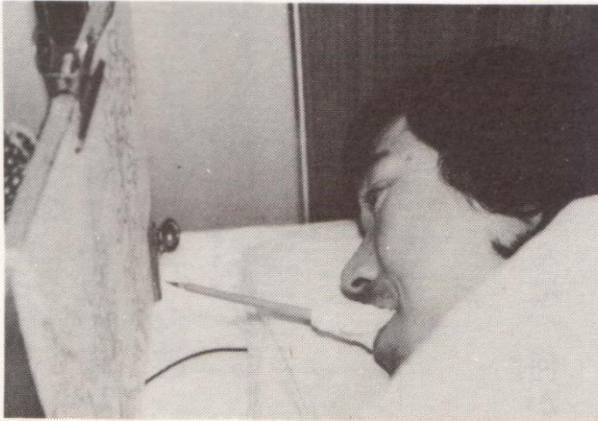
子どもたちは口々に答えました。

その通り。星野さんは、この時初めてペンを口でくわえたのです。

実際に星野さんが筆を動かしている写真を見せました。

みんな、神妙な面持ちで画面を見つめています。

ここで、実際の手記から当時の様子を紹介しました。



初めて書いた字は、カタカナの「ア」の字でした。
くわえていたガーゼは、よだれでぐっしょりぬれ、
あまり力をいれていたなので、はぐきから少し血が出て、ガーゼにしみていました。

うれしくて、うれしくてしかたがありませんでした。

次の日も、次の日も練習をしました。

字が書けたといっても、ミミズがのたくったような字でした。

しかし、何もできないと思っていた私にしてみれば、
スポーツで新記録を出したようにうれしかったのです。

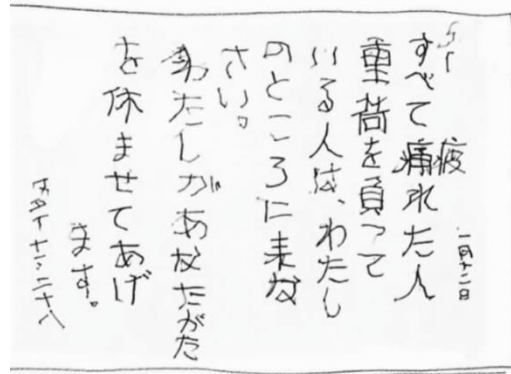
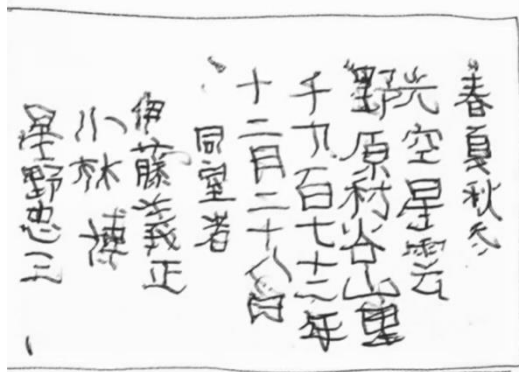
もう一度、器械体操を始めたときのような気持ちでやってみようと思いましたが、

器械体操の美しいわざも、いきなりできる人はいません。

基礎になるわざを、毎日毎日練習して、正しく身につけ、

それを積み重ねて、はじめてすばらしいわざができるようになるのです。
口で字を書くことも、それと同じではないかと思いました。
何年かかってもいいから、時間をかけて、一本の線、一本の点をしっかり
書けるように練習していけば、いつかきっと、美しい字が書けるようになる
と思いました。

子どもたちは、さらにシーンとなって聞き入っていました。
星野さんは、言葉の通り、練習を続けました。
カタカナ、ひらがな、漢字、そして詩や絵にも挑戦していきました。



ページを繰るたびに、
「おお～」
と声が上がりました。

さらに、星野さんは絵にも挑戦します。
右の作品がそうです。
子どもたちは食い入るようにして画面を見つめていました。



では、星野さんの現在の作品を紹介しますね。

そう言って、以下の作品を紹介しました。
一番のどよめきがおきました。



「ええっ！！」

「これさっきの・・・。」

そう、ひとつ前に見せたプロの画家の作品は、星野さんが口で描いたものだったのです。

授業の終わりに伝えました。

これは、どの勉強にも言えるコツです。

それは、「できるまであきらめない」ことです。

全然うまくいかなかたって、中々上手にならなくたって、あきらめないで練習を続ける人は必ず伸びます。

子どもたちの心にどう響いたかはわかりません。

が、少なくとも子どもたちは身じろぎ一つせず、集中して終わりまで話を聞いていました。

そうそう、「勉強のコツ」シリーズのおまけとして、「人生のコツ」も一つだけ教えることにしました。

扱ったのは、星野さんの詩画集の中で私の最も好きな作品です。

一部にマスクをかぶせて見せました。



口に入る言葉は、何だと思えますか。

もう動くことの無い腕がたった一度動くとしたら。

星野さんは一体何がしたいと考えるか。

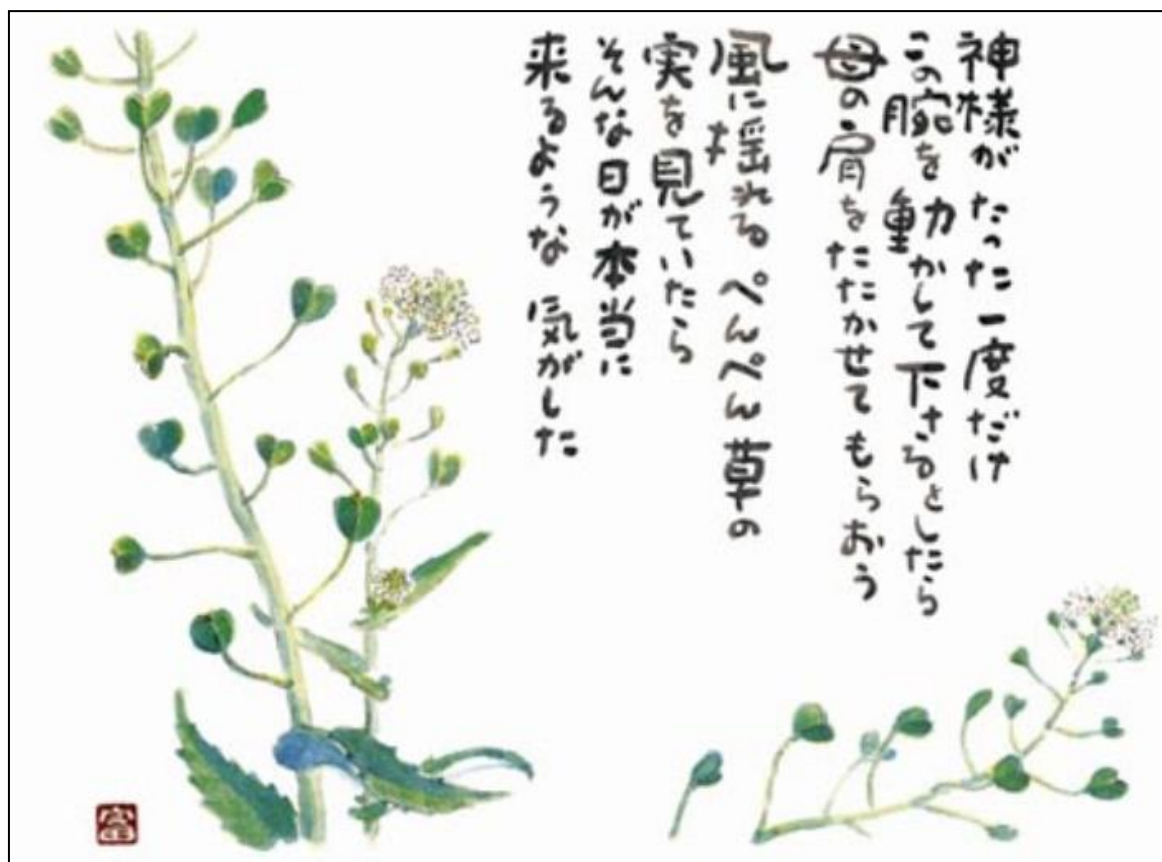
「自分の手で絵が描きたい。」

「もう一度体操がやりたい。」

「先生として授業がしたい。」

「握手をしたい。」

一通り答えが出たところで、マスクを外しました。
みんな、食い入るようにして画面を見つめました。



入院生活中、つらく当たってしまったお母さん。
いつでもどんな時でも、支え続けてくれたお母さん。
そのお母さんの肩が叩きたいと星野さんは想っているんですね。
みんなにも、自分がどんなに大変な時だっていつも支え続けてくれている人が近くにいるはずです。
その人に、ありがとうという感謝の気持ちを持って生きていく事。
そうすると、人生の中で素敵な花がたくさん咲いていくという事を、星野さんの作品が教えてくれているような気がします。

このように話して、授業を終えました。

星野さんの作品や本が、近々図書館に入荷される予定です。興味のある人は、ぜひ手に取って読んでみましょう。すてきな作品の数々が星野さんの生き方と共に飛び込んでくるはずです。(文責：渡辺道治)

[1学年通信「コスモスハーモニー」読者ページ \(google.com\)](#)